# 難民問題も「まちのコイン」でジブンゴト化

こんにちは　元気だった？
ありがとう
まちですれ違うときの何気ない会話が
「まちのコイン」のつながりから生まれた
それは、あなたがここにいていいんだよと
言ってくれているようだ

## 必要とされることが生きる活力に

内紛や迫害により日本に逃れてきた難民申請者は1年で10・375人（2019年）。しかし、日本政府が「難民」と認定したのはわずか0.4％の44人と、他の先進国の認定率約20～50％に比べて極めて低い数字となっている。難民認定されるまで、働いて収入を得ることができないことから、生活に困窮する難民も少なくない。そんな難民を支援するシェルター「アルペなんみんセンター」が鎌倉の十二所に昨年2月、オープンした。

コロナ禍で地域の人との交流がなかなかできずに1年が過ぎたころ、小田原市、鎌倉市、厚木市、日吉駅周辺の4地域で導入されている神奈川県の「SDGsつながりポイント」のことを知り、5月からスポットとして「まちのコイン」を活用するようになった。

- 「スリランカ出身のフォジさんが本場の紅茶の淹れ方を伝授します－300クルッポ」
- 「ミャンマー出身のミミが手相鑑定します－200クルッポ」
- 「コンゴ出身ムンちゃんと一緒にアフリカ料理を作りましょう－500クルッポ」

難民の方の特技を生かした体験や母国を知ってもらう料理づくりなどをクルッポ（鎌倉市での「まちのコイン」通貨名）と引き換えに提供している。

このシェルターにくるまでの難民の方々の生活は社会から断絶され、見知らぬ日本で家族も友達もいない孤独なものだった。「心が疲れている人も多く、『まちのコイン』を使い始めるまでは部屋に閉じこもっていました。」と話すのは、このチケットを難民の方と一緒に考えているアルペなんみんセンタースタッフの及川さん。「まちのコイン」を通じて難民と地域とのつながりが生まれればと始めたが、その効果は想像以上で、難民の心にも大きな変化をもたらした。「みんなの表情がみるみる明るくなり、口数が増えました。『今日は私に

人と人が仲良くなるアプリ「まちのコイン」を使って、難民の方にもできることを提供してもらうことで地域の人とふれあうきっかけに

お客さんからの予約はある？』とチケットを使われることを毎日、心待ちにしています。」

自分を訪ねてきてくれる人がいる、必要としてくれている。それが難民の方々の生きる活力となっているようだ。及川さんは今後の夢をこう語ってくれた。

「地域の方が『まちのコイン』を通してここにいる難民のみんなと知り合い、まちで出会った時に挨拶をしてくれるようになると嬉しいですね。それが難民の存在を知り、認めることにつながるような気がします。」

人と人のつながりをつくる。従来のお金だけでは換算できない価値を創出し、お互いを尊重する。「まちのコイン」の目指す世界は、国境や地域を超えて広がり始めている。

**面白法人カヤック概要**

「つくる人を増やす」を経営理念に掲げ、古都鎌倉から、ゲーム制作や広告企画、地域通貨、関係人口促進など、固定観念にとらわれない発想力・企画力で面白いサービスやコンテンツを提供するクリエイター集団です。www.kayac.com

## まちのコイン

お金で買えない体験で地域をつなげるコミュニティ通貨サービス。神奈川県のSDGsつながりポイント事業のほか、福岡県八女市や東京大塚駅など全国9カ所で導入されています。https://coin.machino.co/